

防災教育を通じた山林理解の可能性

兵庫県立大学 六甲山研究チーム

代表 森下洋平 水川堯

平田莉子（小谷美尋 藤田有紀 宮廻彩）

1. 研究の背景と調査目的

地域再生の重要性が唱えられて久しい。近年も「地方創生」の掛け声の下、国を挙げて取り組みがされているが、それらが本当に地方の実情に即したものは甚だ疑問が残る。

地域再生の手法として、大別して、外発型のものと同発型のものがある、とされている。前者は、地域の外部から積極的に資源や人材、需要を呼び込もうとするものであり、後者は地域に存在する資源や人材の好循環を目指すものである。これらは二者択一のものではないが、持続可能な地域社会を目指すのであれば後者を軸に議論を進めるべきであろう。

では、内発型の地域再生を目指す上で必要となる事項は何であろうか。筆者らが着眼したのが、神戸市北区下唐櫃地区での取り組みである。この地域については既に柴田(2015)や川添(2016)等の先行研究がされており、その中でも内発型の地域再生の萌芽となり得る要素が見出されているが、同時にそれら取り組みが現在抱えている限界もまた示されている。

そこで筆者らは、これら先行研究を踏まえつつ、そこで示された限界を如何にして乗り越え、真に持続可能な地域づくりを行う為に必要な要素は何かを見出すべく、本研究に取り組むこととなった。これから本稿で明らかにしていくが、最も重要となるのは、地域の住民が一体となって今後の地域を展望し協働していくことであり、それを促す為に地域住民がその地域の歴史や現状について知り、考える環境づくりが必要であるとの結論に至った。

2. 調査方法

文献調査と現地調査を軸に行う。

文献は『有野町誌』を使用し、下唐櫃地区の歴史や地域的特徴を研究した。また、神戸市が公表している『下唐櫃地域森林に関する意識調査業務報告書』で示されたアンケート調査結果も参考にしている。この資料を使用した理由として、住民の森林に対する意識を正しく把握することが、内発的な発展を考究する上で不可欠であると考えたためである。

一方、現地調査は、伊勢講山で行われる山初め等のお役を見学、時に一部作業に参加し、その中で地域住民の方々へ聞き取り調査を行った。

3. 調査結果

アンケート結果を分析した結果、大きな特徴として挙げられるのが、若年層ほど山林の実情を理解していないということである。例えば「あなたにとって、下唐櫃地区の森林をどのように感じていますか?」という問いに対し、若年層は「自然環境」との回答が多い。これに対し、年代が高くなるほど「財産」という回答が多くなっている。これは、山林が

単に自然に形成されたものではなく、先人が利用・管理を続けてきたことで、価値を生み出し現代にまで引き継がれていることを知らない、ということの意味していると解釈できる。

また「森林にはいろいろな機能があります。下唐櫃地区の森林において重要な機能はどれだと思いますか?」との設問に対しては、若年層ほど景観(風景)を重視する傾向があるのに対し、高齢層ほど災害防止を重視していることが見て取れる。実際、山林の適切な維持は土砂水害の防止に大きな役割を果たしている。この機能に関しても、若年層の理解が十分に為されておらず、森林への関心低下へと繋がっている可能性も否めないであろう。

現地調査では、地域の人々から現状に対する率直な意見を聞くことが出来た。例えば、下唐櫃林産農業組合の山林部長・西向忠義氏は、「お役に参加してくれる地域住民が少ない」、「参加してくれていた人々も高齢化している」、「外部から関心を持って来てくれる人が多い」、という印象を持っている。地域住民の山林に対する意識の低下に対する危機感を抱いているものと言えるであろう。また、まちづくりコンサルタント会社の川本令子氏は、山初めといった取り組みを継続していくことで地域住民が関心を持ち、参加してくれることを期待したいとの旨を仰っていた。

一方、まちづくりコンサルタント会社の安田正氏は、お役等の活動で、かねてより参加している人々が率先して作業をしているが、新たに参加しようとする者は何をすべきか分からない、と指摘している。その上で、こうした活動が婦人会や子供達といった地域の人々に周知される為の方策を考えるべきではないかという意見を持っている。今回の山初めは外部者にも開かれたもので、筆者らも薪割等の体験をさせてもらえたが、普段の作業ではより熟練された技術が必要とされる為、これまで参加したことの無い者には近付き難いものとして映ってしまうと考えられる。無論、山林の作業は非常な危険を伴うものであり、それらは何よりも実際の経験によって身に付くものであるということをおぼえれば、非作業従事者が参加し辛いと感じても致し方のないという側面もある。その為に緩衝材として、今回の山初めのように外部の人間が参加しやすい環境を作ることが重要であると考えられるが、先述の西向氏の話にある通り、肝心の地域住民があまり参加していないという課題がある。この現状から抜け出せる為には、その前提として地域住民が山林の重要性、ひいては地域について関心を抱くような仕組み作りが欠かせないであろう。その為には具体的にどのような方策を取るべきであろうか。



伊勢講山での山はじめの様子
(筆者撮影)

4. 考察

地域の再興の為に必要な事柄は何であるか。その最たるものは、やはりその地域の資源や文化に対する愛着や誇り、そしてそれらが形成されてきた歴史への理解であろう。それがあればこそ、人々はそうした財産を引き継ぎ、更に後代まで継承していかんとする主体性と覚悟を持つ、と考えられる。そして、地域の歴史の中には、災害等によって共同体が「危機」を経験し、それを乗り越えてきたという事柄も含まれている。それは、次なる「危機」に如何に備え、相対すべきか、という教訓としての意味合いも持っている。

例えば、三陸沿岸地域には、津波が来たときはとにかく自分の命を第一に守るよう、各々高いところに逃げるようにという、「津波てんでんこ」という教えがあった。これは、何度も津波を経験してきた当地域で、家族全滅を避けようと編み出された知恵であった。この教えが学校で徹底されていた岩手県釜石市の小中学生の、東日本大震災での津波による被害は小さなものに止められた。

これは、災害による「危機」を経験しながら、それでもなお、共同体を維持せんと先人たちが編み出してきた智恵である。そして、こうした智恵を共同体の成員が今日に至るまで語り継いできた、ということの重要性を改めて認識しなければならない。逆に言えば、その伝承が途絶えることがあれば、次なる「危機」の発生により甚大な被害を被る結果に繋がりがねない、ということでもある。

山林と関連付けて論ずると、適切な管理のされていない山林は、水源涵養機能が損なわれ、洪水や土砂の流出を引き起こす危険がある。まだ、過度に木々が密集した森林では、山火事が発生した時に別の木へと火が移り易く、長期化、大規模化する恐れもあると指摘されている。このように防災について考えても、山林は非常に重要な役割を果たしており、地域住民がそのことを理解することで、災害防止意識の高まりにも結び付くであろう。

下唐櫃では、『有野町誌』によれば、昭和13年の阪神大水害の際、同地区も山津波を伴う岩石や木、土砂の流出という被害を受けている。この災害は、六甲山地における砂防ダ

ムの必要性が唱えられるようになるまでに甚大なものであったが、被害が拡大した要因として、自然的要因も挙げられるが、宅地開発、道路建設の際に河道が埋め立てられたり暗礁にされたことによって流水面積が狭められた為であるという、人為的要因も指摘されている。この災害の経験から、「常に居て災難を忘れず」という教訓を示した水難碑が、下唐櫃の有馬橋傍に建立されている。



下唐櫃有馬橋の傍にある水難碑
(筆者撮影)

こうした過去の出来事の伝承が図られている一方で、山林が防災に果たす役割の大きさについては、前に挙げた神戸市のアンケート調査からも分かるように、若年層には浸透していない。今後この年代の人々が地域社会を担っていくにあたり、山林の重要性が伝承されぬままであれば、再び災害に対して脆弱なものになってしまう危険性も孕んでいる。



阪神大水害を機につくられた砂防ダム (筆者撮影)

若年層に山林の重要性を伝承するためには、学校教育にそれを取り入れることが有効であると考えられる。奇しくも現在、南海トラフ地震の発生が予想されている中、防災教育の必要性が説かれつつある。その中では、生徒一人一人が地域の実情を理解し、主体的に

行動するようになることが目指されている。その中に山林の重要性を盛り込むことで、山林管理から防災まで包括的な教育が可能となると考えられる。即ち、山林管理が適切に為されなければ災害に対し脆弱になってしまうということを理解させることで、子供達が主体的に山林に関わろうという意識を醸成することが出来るであろう。但し、単に子供達に危機意識を抱かせるだけでは逆に地域を嫌って地域から離れていってしまうという逆効果も考えられる。そこで、山林が地域住民の生活を如何に豊かなものに行っているかをも併せて伝えていくことが肝要である。

そしてこの取り組みは、学校が単独で行えるものではなく、林業組合はじめ様々な地域団体との協働が必要となろう。これら団体は一方で子供たちに地域の実情に関心を抱いてもらう為の役割を担うと同時に、子供達が主体的に活動する姿を目にすることで、自分達の地域への意識のあり方を顧みるきっかけともなり得る。防災教育を介して、それまで以上に団体同士が連携を密にするようになり、地域が一体となりその将来の在り方を議論するきっかけにもなるであろう。

5. 今後の展望

今回の研究では、住民の地域・山林への意識について、神戸市が公表しているアンケート調査に拠って考察を行った為、研究の方向性と必ずしも合致したデータを得ることが出来なかった。今後は地域の住民、特に学校の生徒に対して意識調査のアンケート等を行うことが出来ればと考えている。

また、林業組合や消防団等の各団体が現状地域課題に対しどれだけ連携して取り組んでいるのか、聞き取り調査を行いたいとも考えている。特に本稿でも繰り返し述べた通り、防災の為にも山林の適切な管理が不可欠であり、今後各団体が連携を図る上で障壁となるであろう要素を見出し、如何に調整を行うべきか考察を深めたいと考えている。

最後に、本稿が今後の地域振興の一つの方向性を示すことで、下唐櫃をはじめとした地域の活力向上へと繋がるための一助となればこの上の無い幸いである。

6. 参考文献

- 神戸市有野更生農業協同組合（1988）『有野町誌』神戸市有野更生農業協同組合
桑子敏雄（2016）『わが町再生プロジェクト』角川書店
山崎亮（2011）『コミュニティデザインー人がつながる仕組みをつくる』学芸出版社
山崎亮（2012）『コミュニティデザインの時代ー自分たちで「まち」をつくるー』中公新書
速水亨（2012）『日本林業を立て直すー速水林業の挑戦ー』大進堂
小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波新書
高橋博之（2016）『都市と地方をかきまぜるー「食べる通信」の奇跡ー』光文社
山浦晴男（2015）『地域再生入門ー寄りあいワークショップの力』筑摩書房

藤井聡・唐木清志（２０１５）『実践シティズンシップ教育－防災まちづくり・くにつくり学習』悠光堂

高橋裕（２０１２）『川と国土の危機－水害と社会－』岩波新書

大石久和・藤井聡（２０１６）『国土学－国民国家の現象学－』北樹出版

吉川洋（２０１６）『人口と日本経済－長寿、イノベーション、経済成長』中公新書

謝辞

今回の研究にあたり、下唐櫃林産農業協同組合の皆様には、お役の見学という経験をさせて頂き、作業の合間を縫って貴重なお話を伺うことができた。また、まちづくり会社地域計画の皆様にも専門的な知見からお話を伺うことができた。記して感謝する。